【俺】「はぁ～…どうしたものかなぁ…」
ため息をつきながら歩いている俺は、この街で暮らすしがないフリーターだ。
風俗とギャンブルが好きで、気が付いたら消費者金融に数百万の借金をしていた。
毎月の返済のためだけに、やる気のないバイトを続けている。

【俺】「宝くじでも当らねぇかなぁ…」
そして、今日も重労働のバイトを追え、借金の返済に頭を悩ませつつ、
帰宅のために深夜の繁華街を歩いていた時だった。
俺の目の前を、赤い服を着た女の子が、凄い速さで駆け抜けていったのだ。

【俺】「な、なんだあの子…こんな時間に…見た感じ、まだ●学生が●校生くらいじゃないか。
それにあの格好、コスプレか？　…それにしても可愛かったな…
もしかしたら、そういうお店の子なのかな？」

こんな時間にあんな格好で繁華街を出歩いてる女は、風俗嬢に違いないと思った。
風俗大好きな俺は、せめて名前と勤め先だけでも尋ねたいと思い、その子を追いかけていった。

【俺】「はぁっ…はぁっ…たしかこっちに…」
女の子はそのまま人気の無い路地裏に入っていった。
そして路地裏を覗き込んだ俺は、信じられない物を目撃する事になった。

DOWN

【俺】「ひいっ!!? な、なんだこれはっ!!?」
そこにいたのは、見た事も無い生き物…だった。
それはかいだ事のない悪臭を放ち、悪夢のような黒っぽい玉虫色をしており、
臭くて伸縮性のある柱状の触手を、コンクリートのスキマから滲み出していた。
その体は、原形質の小泡でできた不定形の塊であり、体全体から微光を発していた。

【俺】「あっ…あああぁぁぁっっっ…」
【少女】「なっ…!? なんでこんな所に一般人が!?
は、早く逃げなさいッッ!!」

それを見た瞬間、俺はあまりの恐怖に金縛りにあったように体が動かなくなった。
その生き物は、悪臭を放つ無数の触手を俺に伸ばし。
直後、俺の体に強い衝撃が走った。 触手が俺の体を貫いたからだ。

【少女】「くっ…夢想封印ッッ!!」

少女が手をかざすと、少女の手から強い光が放たれた。
直後、その生き物はこの世の物とは思えない悲鳴を上げ、光に溶け込むように霧散していった。

【少女】「っ…い、急いで処置しないとっっ…!!」

駆け寄る少女の手が、俺に触れる前に、俺はその場に倒れこみ、意識を失った。

【俺】「…んっ…あれ？」
【少女】「よかった、気が付いたみたいね」
気絶していた俺を、心配そうな顔で覗き込んでいた少女が、笑顔になった。
俺は体を起こしながら、曇った頭を必死に回転させて、何があったか思い出す。
【俺】「確か俺、化物に襲われて…」
【少女】「そうよ、私があの化物と戦ってる所に、いきなり貴方が出てくるんだもの。びっくりしちゃったわ」
あっけらかんと少女は言う。本当に化物だったのか？　夢ではなかったのか？
しかし、本当にそうだとしたら、俺の体を貫いたあの痛みが残っていないのは不自然だ。
俺は慌てて自分の胸部を手で確認した。
その瞬間、ふにっとした柔らかいものが俺の手にふれた。

【少女】「ちょっと…私の目の前で、あまり触らないでよっ…恥ずかしくなって来るじゃない…」
【俺】「えっ…？　なんだこれっ？　どうなって…？」
俺はまじまじと自分の体を見る。良く見れば小柄になり細くなり、目の前の少女と同じ服を着ている。
腰は細く、肌は白く、髪は長くサラサラで、そして胸は柔らかくて大きかった。

【俺】「お、おい…これ一体、どういう…」
【少女】「貴方の体は肺を貫かれてたわ。だから救急車を呼んで運んでもらったの。
恐らく当分は入院確定ね。でもそれだと、貴方が不便でしょ？
だから、巻き込んでしまったお詫びとして、私の体を模した式神に、貴方の魂を移したの。
貴方の体が用意できれば良かったんだけど、良く知った体じゃないと再現できないから…」

少女はあっけらかんと言う。　式神？　魂を移す？　何言ってんだこいつ。
でも、実際に俺の体は、目の前の少女と同じなわけで…荒唐無稽な話だが、俺は信じざるを得なかった。

【少女】「信じてもらえたようで何より。さて、それじゃ説明させてもらうわね」
まず、この少女の名前は博麗霊夢と言い、幻想郷という、この世界とは別の世界の巫女をしているらしい。
その幻想郷から逃げ出した魔物を追って、この世界に来て戦っている最中、
俺を巻き込んでしまった、という事だった。

【霊夢】「次に、その体についてなんだけど…」

今、俺の魂が入っているこの式神は、霊夢が霊力で作り出した物のようだ。
式神とは言え、飯も食う必要があるし、切れば血も出る、何一つ人間とは変わらない体らしい。
しかし注意点として、この体の方がいいと心の底から思ってしまうと、
元の体と繋がっている魂の糸が切れてしまい、二度と元の体に戻れなくなってしまうようだ。
つまり、自分の体が死んでしまうという事だ。　俺は死という言葉に思わず身震いした。

【霊夢】「それじゃあ、くれぐれも気をつけてね。私は魔物退治のためにもう行かなくちゃいけないから」
【俺】「あ、ああっ…」
そう言って、霊夢は元気に駆け出して行った。
俺は夜明け前の薄暗い空を眺めながら、今後の事をボーっと考えた。

【俺】「まさかこんな女子●生みたいな体になるとは…」
俺は無意識に呟いた自分の言葉で、改めて自分が霊夢の体になっている事を思い出した。
そして股間部分をさわり、自分のペニスが無くなっている事を改めて実感した。
それを意識した途端、霊夢の体を隅々まで確認したいという欲求が、俺の頭を支配しはじめた。
【俺】「…これがしばらく自分の体になるんだし、ちゃんと確認しとかないとな…」

俺は目の前にあった公園のトイレに入り、トイレにあった大きな鏡に自分の姿を映した。
そこにはまぎれもなく、先ほどまで話をしていた博麗霊夢の姿が映し出されていた。
【俺】「ほ、本当にあの子そっくりになってる…！」
俺は驚いた後、まじまじと自分の体と顔を眺めた。
さっきまでは、信じられない出来事が立て続けに起きていて、
じっくり認識できる余裕は無かったが、改めて見ると、この子無茶苦茶可愛いぞ。
【俺】「こ、これが今の俺なのかぁ…俺の体が、こんな美少女になったのか…」
そして俺は、霊夢の肌を確認するために、スカートと上着に手をかけた。

俺が上着とスカートを脱ぐと、その下にすぐ白い肌が見えた。
どうやらこの体、下着を付けていないらしい。
【俺】「こ、これが霊夢の…いや、俺の裸っ…」
予想通り真っ白いキメの細かい肌、引き締まったウエスト、
張りの良いおっぱい、ピンク色の乳首、毛の生えていない割れ目。
どれを取っても、これ以上ない最高の女の子の裸だった。
【俺】「なんだこれっ…エロすぎるだろっ…」
俺はどんどんムラムラして、我慢しきれず個室へと駆け込んだ。

俺は霊夢の衣装を抱えてトイレの個室に入り、内側から鍵を閉めた。
【俺】「さ、さて、これで心置きなく…」
改めて、俺は自分の体を嘗め回すように見た後、
その体をじっくり嘗め回すように触れた。
胸の柔らかさ、ピンクで形のいい乳首、
肌のきめ細かさ、頬のぷにぷにさ、
唇のぷるぷるさ、髪の毛のさらさら感、
細くてすらりとした指、綺麗な爪、引き締まったお腹、
太股のはり、靴下の上からでも分かる引き締まった足首、
何もかも、今まで風俗で味わってきた女達とは、段違いのレベルだった。
そして俺はいよいよ、霊夢の一番大事な所、
まだ毛も生えていない幼い割れ目へと指を伸ばしていった。

【俺】「ひぃんっ!?」
興奮のあまり震える指先で、
無造作に割れ目に手を伸ばした俺は、
爪の先を割れ目にひっかけてしまった。
その瞬間、電気が走るような刺激が、
下腹部から脳天まで突き抜けていった。
【俺】「い、今の声…俺が出したのか…?
それにこの感覚…感度良すぎるだろこの体…」
俺は恐る恐る、指をゆっくりと割れ目に沿わせて動かしていった。
敏感すぎる割れ目をこすり上げるたび、我慢しきれず可愛らしい声が漏れてしまう。
気持ちいい。女の体って、こんなに気持ちのいいものだったのか。

【俺】「はぁっ…はぁっ…」

じっくり時間をかけて愛撫すると、
敏感な強い刺激にも体が慣れ始め、
気持ちよさだけが芯に残り始めた。
割れ目はゆっくりと濡れていき、
幼い割れ目がゆっくりと開き始めた。

【俺】「っ…あっ…♥」

指に付いた愛液をすくって、さらに割れ目を広げるように愛撫する。
俺はさらに奥を愛撫したくなり、処女膜に開いた小さな穴から指を入れて、
奥をゆっくりとかき回していくと、外を愛撫するのとは違った気持ちよさを感じた。
俺はもっともっと奥までかき回したい、そう思い始めていた。

【俺】「な、何か入れるものっ…」
俺がトイレの床を見ると、そこには1本のボールペンが落ちていた。
トイレの床に落ちているボールペンなど、流石に汚いかと思い少しためらったが、どうせこの体は式神で、一時的なものだ。
俺はペンを拾い上げ、割れ目へと突き刺した。
【俺】「あっ♥ これ気持ちいいっ…♥」
膣内部の刺激は、想像していたよりもずっと気持ちが良かった。
膣内では大して感じない女が多いと言うが、霊夢の体は中の方がずっと気持ちいい。
俺はボールペンの先端を動かし、夢中になって膣内をかき回していった。

【俺】「んっ…この感触はっ…」

俺がさらに奥へペンを埋没させていくと、
ペン先がコリコリした感触の何かに触れ、
それ以上押し込む事が出来なくなった。

【俺】「これ、まさか子宮口…？」

俺は子宮口に落書きするかのように、
インクの枯れたペン先を、子宮口に押し当てかき回していく。
子宮口がコリコリとペン先で愛撫されると、最高に気持ちがいい。
やっぱり霊夢の体は奥ほど気持ちいいんだ。なら、さらにその奥は…？
俺はさらに子宮口を丁寧に愛撫し、その奥へと繋がる入り口を探した。
すると、ほんの少しペン先がめり込む入り口があったので、ゆっくりとそこへねじ込んでいった。

【俺】「あっ…あああぁぁっっ…♥」
ペン先は子宮口を押し広げながら、
ゆっくりと内部へと突き刺さっていく。
子宮口を押し広げられる圧迫感、痛み、
そして快楽に、息も絶え絶えになる。
でも、こんな美少女の最深部を犯すという、
そんな背徳的な行為を、止められるはずもない。
俺はそのまま、力任せにペンをねじ込んだ。
【俺】「ひぎっ…！　あああぁぁぁぁっっっっ!!!」
体の芯を貫かれるような痛みと、強烈な快楽に、俺の脳天は真っ白になった。
俺は生まれて初めて、女としての絶頂を味わい、情けない悲鳴を上げて体を震わせた。

【俺】「はぁっ…はぁっ…」

俺はそのまま絶頂の余韻に浸った。
女の絶頂は男の絶頂とは比べ物にならないと、
以前から聞いていたが本当にそうだった。
こんなに気持ちいいなんてずるいとすら思う。

【俺】「それにしても…気持ちよかったな♥」

快楽の波が収まった所で、俺は改めて自分の体を見た。
こんな美少女が、こんな薄汚い公衆トイレで裸になって、
堕ちていたボールペンを子宮の中に突っ込んで、オナニーしていたのだ。
オナニーの快楽は勿論の事、この背徳的な状況にもゾクゾクとした興奮を覚えてしまう。
元の肉体に戻るまで、飽きることの無い生活が送れそうだと、俺は期待に胸を膨らませた。